

平成8年(1996年)7月10日発行

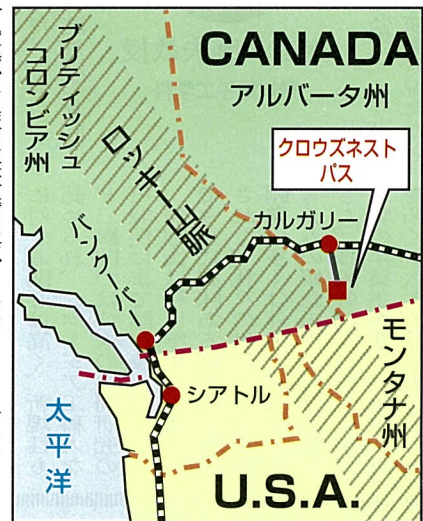
カナダ研修所 正式オープン 文化交流に地元も大きな期待!!

建築学科 波多野 純教授

かねてより修復工事を進めてきた日本工業大学カナダ研修所(N.I.T. International Campus, Canada)が、六月一日、開所式を迎えた。

式典前、町の人々が、続々と詰めかけた。真つ赤な服のおばあさんが、うれしそうに建物を見上げていた。町のシンボルとして親しまれてきた旧裁判所がよみがえり、文化的な施設として受け継がれることを喜んでいる。

式典は、研修所の代表であるフィル・キャン氏の司会が始まった。大川陽康理事長は、美しいクロウズネストパスの自然と、異国での心温まるふれあいは、学生の人格形成に大きく寄与するであろうことを確信し、地域社会に貢献したいと述べられた。州議会議員デニス・トーマス氏からは、心から歓迎するとの挨拶とともに文化財指定銘板が寄贈された。さらに、州歴史資源財団、同地域開発相、町役場、同歴史保存委員会、提携教育機関であるレスブリッジ・コミュニティ大学などの挨拶が続いた。挨拶では、それぞれに豊かな表現で、カナダと日本工業大学の協力をたたえ、歴史的な文化財の保存修復を喜び、今後の多様なプログラムへの協力を約束してくれた。



写真提供/松下電器産業(株)



学園の先達

写真は、松下電器産業(株)の創業者・松下幸之助翁(左)と語り合う、大正12年、本学の前身である東京工科学校を卒業し、同社の副社長・技術最高顧問を務められた中尾哲二郎氏(右)の在りし日の姿。なお同氏の関連記事は5Pに掲載。(写真提供/松下電器産業(株))

日本工業大学カナダ研修所は、カナディアン・ロッキーズの東側、アメリカ国境に近いアルバータ州クロウズネストパスにある。人口六七〇〇人の小さな町。建物、一九二三年に建てられ、裁判所・警察として使われてきたもので、州の文化財に指定されている。地



修復工事担当のケン・ソレンセン氏(左)から大川理事長へ、さらにフィル氏(中)へと鍵が引き渡された



N.I.T.と地元の生徒によるテープ・カット

(写真撮影/筆者)

部分も本来の姿に戻すように修復し、歴史的な雰囲気を感じながら、研修・文化交流の場として利用できるように計画した。一階の法廷は当時の姿のままに、卒業式や講義に、オフィスや居間はカナダと日本の工業技術や文化を比較するミニ・ミュージアムとしたい。付属東京工業高校が製作したミニ・SILもすでに到着し展示された。二階は、教室と七つの宿泊室。地下には、留置所が残っているが、ワークショップに改装する。この町は、大自然の中で四季を通じてスポーツを楽しむことができ、大きなスーパーマーケット、レストラン、病院が完備し、生活には何の不便もない。このすぐれた環境下にある施設が、豊かなアイデアで活用されることが期待される。

「科研費」補助金内定 新規・継続含め7件

文部省による平成八年度科学研究費補助金内定した。本学において対象となつた研究は、新規・継続を含め七件で、詳細は以下の通り。

- ★基礎研究(C)
 - ①電気電子工学科・石川豊助教授による「固相拡散によるシリコンウェハ内への浅いpn接合の低温における形成方法の確立」(新規)
 - 研究目的は、基板シリコンに損傷を与えない固相拡散により五〇〇℃以下でシリコン内に浅いpn接合を形成する方法を確立することにある。
- ★基礎研究(B)
 - ①建築学科・桑原文夫教授を研究代表者として、田中実(建築・助手)が分担する「杭基礎の周面摩擦現過程に関する研究」(継続)
 - ②建築学科・北後寿教授を代表者として、竹内淳彦(共通系・教授、宮坂修吉(建築・教授、加村隆志(建築・講師、小竿真一郎(建築・講師、貫井光男(建築技術センタ1・講師、佐藤勝行(建築・教育技術員)が、分担者として参加する「沖縄地方組積造建築物に関する学術調査研究」(継続)
- ★基礎研究(C)
 - ①共通系・大野修一助教授を代表者として船橋昭一(共通系・教授、橋本英哉(共通系・助教授、石崎克也(共通系・講師)が分担者として参加する「解析関数空間とその上の作用素の研究」(継続)
 - ②システム工学科・三宅正二郎教授による「走査型プローブ顕微鏡による層状結晶材料の原子オーダーの摩耗研究」(継続)

工業技術博物館後援会第八回総会 活動の充実・発展を確認



開会の挨拶を行う大和田国男後援会長(柳不二越 前社長)

五月三十一日、学友会館ホールにて、日本工業大学工業技術博物館後援会、第六回総会が開催された。冒頭、後援会長の大和田国男氏(柳不二越 前取締役社長)が、「教育における博物館の効用がますます必要とされ、次いで神馬敬学長を強調。次いで神馬敬学長

建築学科・難波研OB 育英資金に寄付

この寄付金は、恩師であつた難波先生の教授昇任を祝して卒業生が持ち寄つたお金の一部である。しかし、残念なことに難波教授は先年、志半ばにして病に倒れ他界されました。そこで、難波研究室で学んだ卒業生の皆さんは、先生の遺徳を

最近海外からの見学者も多い工業技術博物館。

千葉大の吉田教授が特別講演!!

制御装置に頼らない 機械技術の向上を...



五月三十一日、学友会館で行われた工業技術博物館後援会第六回総会において、吉田嘉太郎先生(写真右)による特別講演「日本の工業機械」が催された。

ちなみに吉田先生は、千葉大卒業後、通産省工業技術院機械試験所(現機械技術研究所)で研究に従事するなど、幅広い経歴を持つ。

講演は、「工作機械の本質」「生産の現状」「工作機械技術の進展」「将来の方向」の四部から成り、我が

国の高度化・多様化する工業生産の中において、今後の工作機械の在り方を探るものとなった。

工作機械は「ものを作るための機械を作る機械(マザーマシン)」として、あらゆる国の発展を支える基礎となるべく、重要視されてきた機械である。工作機械というときに、旋盤が思い浮かぶが、現在では消費者の欲求を反映し、ユーザーである生産者の多種多様な要求に応じた多くの工作機械が作られている。すなわち製作する「もの」の速度に対応した、多機能から単機能までの工作機械が作られている訳である。

統計によれば、多くの工作機械の中でマシニングセンタ(多機能旋盤)とNC工技術の向上に関する基本的な点が重要だとも強調する。

の五〇%を占めるという。これはひとえにFMS(フレキシブル生産システム)が、現代の日本の生産システムの主流になっていることと証明されているが、一方で問題がないわけではない。工作機械のメーカーから、汎用工作機械を作る技術が失われつつあるからだ。しかし、吉田先生の意見によれば、これからの工作機械の在り方は、単純な高度化の方向にはない。今後重要になると思われるシステム化や信頼性の向上へと向かうためには、NCなどの制御技術に頼らない工作機械本来の技術的な向上が必要であるというのだ。そして、高精度化・高速化・高剛性化というような、加工技術の向上に関する基本的な点が重要だとも強調する。

世界的工作機械メーカーに伍して日本のメーカーが生きていくには、時代の流れに即した形の産業構造を先取りし、工作機械を作り続けなければならぬことは論をまたない。温故知新という意味も含め、今回の吉田嘉太郎先生の特別講演は、工作機械を中心に収集・展示を行っている本学工業技術博物館にとって、有益かつ時宜に合ったものであった。

平成八年度後期より、システム工学において、一級建築士の資格取得が可能な講義がはじまる。担当教授は、この四月に就任された、建設会社で豊富な研究実績をあげられた土屋秀雄教授である。そこで、いまなぜシステム工学の視点に立つての建築学なのか? さらに今後のご研究に対する抱負の一端を、おうかがした。

——ご就任後、まだ二カ月余りですが、まず学園の印象から。

土屋 まじめな学生が多いですね。僕が実際に講義を始めるのは後期からですが、第一期限の教室を、ちよつとのぞくと、ほとんど満席に近い。そして、よく講義を聴いているように感じられる。

ただ、これまで学内を歩いた感じでは、全体として、少しおとなし過ぎる、というのが率直なところですね。

——いい意味で、もっと覇気があつていい。

土屋 それで思うことは、自分の学生時代は、いわゆる専門に入る前の教養学部時代に、いろいろな学部の連中にまじって運動会の役員をやられたりして、ワアワアやってた。で、そういう中から、何か自己主張という積極性みたいなものが自然に身についたように思う。ですから本学の学生諸君も、様々な機会をとらえて他学科の学生たちと交流を密にしてほしいですね。特にシステム工学の場

合は、そういう素養のある無しが、今後の取り組みを大きく左右する。

——さて本題に入ります。が、先生がシステム工学科において建築学を講じる意味合いは?

土屋 僕の専門は(耐震構造)ですが、阪神淡路大地震の際のように、直下型というところ、すぐに活断層と意識することになる。しかし地震というのは、実際には水平動だけでなく、大変に複雑な動きがあるわけですね。で、僕が行った原子力施設の耐震調査研究を例にあげれば、原子力の建屋というものは、おおむね風光明媚な所にあり、見方を変えれば地形や地層が変化に富んでいるわけですね。従って、そういう所に地震が発生した場合、断層が非常に入り組んでいるために、揺れも複雑になる。

——ですから、そういう現象に耐える建物を作るためには、どうしても多角的というか、システム学的な取り組みが必要不可欠なわけですね。従って、その辺り

では、なぜ設計能力が必要かというと、設計は自分の考え方を具体的に反映させる手段だし、またそれができないと、生産管理もできないわけですね。

そして、いわゆる境界領域にある人たちが資格を取って建築分野に参入すれば、より面白く、かつ環境面を配慮した建築ができる可能性が、大いにある。

それから、いまの建設産業というのは、おおむね発注です。つまり何をどう組み合わせるかが、非常に重要な作業で、それはまさにシステム工学なんです。

——これまで先生は、企業の研究で、耐震構造をはじめ、土質、居住環境といった多岐にわたる研究に取り組んでこられたわけですが、今後本学で取り組みたいテーマは?

土屋 基本的には住宅ですね。とにかく、いま家を建てる、大変高価でしょう? 一生働いた退職金を注ぎ込まなければならぬ状況にある。で、土地の値段は何とかしていただくと、建物だけに限らず、例えば、僕は、もっと安くできるんじゃないか、と思うわけです。

そして、僕が考えているのは、代々住めるような住まいで、基礎構造をしっかりと造り、間取りなどは、年代のライフスタイルに即した形で造り変えられるもの。つまり、造っては全てを壊してしまふ従来のスクラップ・アンド・ビルド方式ではないのです。

また今後は、資源問題に照らしても、できるだけ既存のものを活かせる形の住宅づくりが望ましい。従って、今後はその辺りを学生たちと、ぜひ一緒に考えて行きたいですね。

(聞き手 企画室/櫻井)

去る三月、九日間にわたり、ミリ・サブミリ波の応用研究の実情調査のため、ミシガン州立大学など六機関を訪問した。シカゴのミシガン湖畔には氷結が残り、景観がひとときわ映えていた。アトラクタは既に暑く、しかし南部の風はやはり格別で、充実した出張となった。

マイクロ波と赤外線に挟まれた、波長が一〇ミリから一〇〇ミクロンと極めて短いこの周波数帯には各種の分子から放射される電波のスペクトラムが豊富に含まれ、しかも個々のスペクトラムをラジオと同様のチューニングによって混信なく受信できる特徴がある。このため電波天文学やオゾン層の観測など、科学分野で活発に利用されている。一方、工学的応用研究はミリ波の車両用レーダはあるが、波長がさらに短いサブミリ波になると皆無に近い。最大の理由は、大気伝播ロスが大きく、電波応用の代表的な通信、レーダ等には不向きと考えられているためである。

でも何かよい工業的応用があるに違いない。振り返れば、ミリ・サブミリ波の分子による放射吸収の理論は五〇年代に既に確立されている。また、使用周波数を広く利用することも自明である。しかし実際にこの電波を扱えるようになったのは半導体等の進歩の結果で、ごく最近である。そこでこのシールド技術

かんだ。さらにダイヤモンドや超格子素子等の次世代半導体の製造プロセス用ガスモニタにも利用できる筈だと発想が湧いた。このあたりから従来の電波応用の範囲を越える新しい応用の姿が見えてきた。次世代の重要な産業技術に結びつくのではないかと夢が膨らんだ。

気懸りなのは諸外国の動向で、帰国後は特に学生との検討会でさらに興味ある応用例が提案された。我々の世代までの技術開発の多くは外来の、既存のシステムの概念の下で行なわれてきた。技術幹部を目指して学ぶ本学の卒業生が新しい工業分野を拓くシステム技術者に育つよう、研究もそれに相応しい内容にするよう努力したい。

わたなべ・やすお 一九三九年生まれ。米ネネシー州州立大学博士課程電気工学専攻修了。Ph.D. 前防衛庁技術研究本部第二研究所主任研究官。

●新任教授インタビュー
土屋 秀雄教授(システム工学科)

いまなぜ建築にシステム工学か?

平成八年度後期より、システム工学科において、一級建築士の資格取得が可能な講義がはじまる。担当教授は、この四月に就任された、建設会社で豊富な研究実績をあげられた土屋秀雄教授である。そこで、いまなぜシステム工学の視点に立つての建築学なのか? さらに今後のご研究に対する抱負の一端を、おうかがした。

——ご就任後、まだ二カ月余りですが、まず学園の印象から。

土屋 まじめな学生が多いですね。僕が実際に講義を始めるのは後期からですが、第一期限の教室を、ちよつとのぞくと、ほとんど満席に近い。そして、よく講義を聴いているように感じられる。

ただ、これまで学内を歩いた感じでは、全体として、少しおとなし過ぎる、というのが率直なところですね。

——いい意味で、もっと覇気があつていい。

土屋 それで思うことは、自分の学生時代は、いわゆる専門に入る前の教養学部時代に、いろいろな学部の連中にまじって運動会の役員をやられたりして、ワアワアやってた。で、そういう中から、何か自己主張という積極性みたいなものが自然に身についたように思う。ですから本学の学生諸君も、様々な機会をとらえて他学科の学生たちと交流を密にしてほしいですね。特にシステム工学の場

合は、そういう素養のある無しが、今後の取り組みを大きく左右する。

——さて本題に入ります。が、先生がシステム工学科において建築学を講じる意味合いは?

土屋 僕の専門は(耐震構造)ですが、阪神淡路大地震の際のように、直下型というところ、すぐに活断層と意識することになる。しかし地震というのは、実際には水平動だけでなく、大変に複雑な動きがあるわけですね。で、僕が行った原子力施設の耐震調査研究を例にあげれば、原子力の建屋というものは、おおむね風光明媚な所にあり、見方を変えれば地形や地層が変化に富んでいるわけですね。従って、そういう所に地震が発生した場合、断層が非常に入り組んでいるために、揺れも複雑になる。

——ですから、そういう現象に耐える建物を作るためには、どうしても多角的というか、システム学的な取り組みが必要不可欠なわけですね。従って、その辺り

では、なぜ設計能力が必要かというと、設計は自分の考え方を具体的に反映させる手段だし、またそれができないと、生産管理もできないわけですね。

そして、いわゆる境界領域にある人たちが資格を取って建築分野に参入すれば、より面白く、かつ環境面を配慮した建築ができる可能性が、大いにある。

それから、いまの建設産業というのは、おおむね発注です。つまり何をどう組み合わせるかが、非常に重要な作業で、それはまさにシステム工学なんです。

——これまで先生は、企業の研究で、耐震構造をはじめ、土質、居住環境といった多岐にわたる研究に取り組んでこられたわけですが、今後本学で取り組みたいテーマは?

土屋 基本的には住宅ですね。とにかく、いま家を建てる、大変高価でしょう? 一生働いた退職金を注ぎ込まなければならぬ状況にある。で、土地の値段は何とかしていただくと、建物だけに限らず、例えば、僕は、もっと安くできるんじゃないか、と思うわけです。

そして、僕が考えているのは、代々住めるような住まいで、基礎構造をしっかりと造り、間取りなどは、年代のライフスタイルに即した形で造り変えられるもの。つまり、造っては全てを壊してしまふ従来のスクラップ・アンド・ビルド方式ではないのです。

また今後は、資源問題に照らしても、できるだけ既存のものを活かせる形の住宅づくりが望ましい。従って、今後はその辺りを学生たちと、ぜひ一緒に考えて行きたいですね。

(聞き手 企画室/櫻井)

平成9年度 推薦入学について

日本工業大学 教務課入試係
TEL 0480-33-7507
FAX 0480-33-7527

【推薦入学A方式】
過去の入学実績(入学後の成績を重視)を勘案して推薦依頼生徒数を決定し優秀な生徒諸君をご推薦いただく指定校制(学科指定)です。

出願期間	平成8年10月1日(火)～10月7日(月)
合格発表	平成8年10月20日(日)

【推薦入学B方式】
成績概評B以上を前提条件とし、特長・特技をもった生徒諸君を広く推薦していただきます。

第一回	出願期間	平成8年9月2日(月)～9月30日(月)
	面接	平成8年9月29日(日) 10月1日(火) 10月2日(水) 10月3日(木) 10月4日(金) 10月6日(日) 10月7日(月) 10月8日(火)
	合格発表	平成8年10月20日(日)

*面接において、地方会場(仙台、新潟、岡山、松本、名古屋、静岡)および9月29日の大学会場を希望する場合は、9月20日(金)までにお願いしてください。

第二回	出願期間	平成8年11月25日(月)～12月6日(金)
	面接	平成8年12月11日(水)
	合格発表日	平成8年12月22日(日)

- ◆工学部
機械工学科
電気電子工学科
建築学科
システム工学科
情報工学科
- ◆大学院工学研究科
(博士課程 前期・後期)
機械工学専攻
電気工学専攻
建築学専攻
システム工学専攻

学園創立九〇周年に向けて…… 中尾哲二郎氏（元松下電機）の歩み

前号で、わが国初の飛行機づくりに挑戦した学園の伝統心につれて、そこで本号から二回にわたって、文字通りその心に生き、日本の産業界に大きな足跡をのこした先達・中尾哲二郎氏（昭和五十六年没）を、ご紹介したい。

大阪府守口市にある松下電器産業（株）本社。その正門を入った右手に、瀟洒な中央研究所が建つ。同所は、研究本部、技術・品質本部、生産技術本部を有し、傘下に合せて二十の研究所が設置されているが、高性能電化機器および新規事業開発のための研究開発に取り組む中尾哲二郎氏（技術最高顧問）ゆかりの（中尾研究所）だけは別格で、本社研究所全体のシンボルの存在（同所開発企画担当部長・森國人氏）である。

いまさら言及するまでもないが、松下電器は、丁稚小僧から身を起し、一九一七（大正六）年に改良ソケットを考案して会社を設立。のちに「経営の神様」とまで称された松下幸之助氏の逝去にちなんで松下電器産業が発行した「技術者魂」（非売品）に掲載の「自伝・ぼくの歩んできた道」によれば、工場での生活は、朝六時に起床、夜の十一時によく床につくという厳しいものだった。

お同社で（中尾研究所）が重きをなしているのは、その「技術者魂」こそが企業のさらなる発展の原動力と明確に位置づけられているからに他ならない。

中尾哲二郎氏は、一九〇一（明治三十四）年、明治大学に程近い東京神田猿樂町で、父教太郎・母あかりの二男一女の次男として生を受けた。

生家は、大学から小学校までの制服のボタンや帽章など金属装飾品加工業を営み、学校が多い場所柄、羽振りがよかった。が、哲二郎氏が小学校に入学した年に母親が病没。さらに小学校卒業を前に工場が破産、やむなく卒業と同時に、ライターやネクタイピンなど、やはり金属装飾品製造業の浜野製作所に丁稚奉公に出された。

現在、松下電器の住宅設備本部の営業部長を務めるご子息の誠良氏によれば、「生涯、神田生まれを誇りにしていた」そうだが、それは多分、分厚い古書街を擁し、独学の志しに込められた土地柄への愛着によるものと推察される。

ともあれ、そんな努力が実って中尾氏は、同社で欠かすことのできない人材になった。が、ここでも念願の夜学への通学は、かなわなかった。

そこで今度は、新しく八時間労働制を打ち出した始めた日本光学の入社試験を受けた。しかしながらそのことが友人の口から支配人に漏れ、「特例として夜学への通学を認めるから」と強く慰留され、一九二〇（大正九）年、中尾哲二郎氏は、晴れて本学の前身である東京工学校機械科（夜間）に入学したのだった。（S）



松下電器産業（株）本社内の中央研究所および東京工学校時代の中尾哲二郎氏。写真提供＝松下電器産業（株）

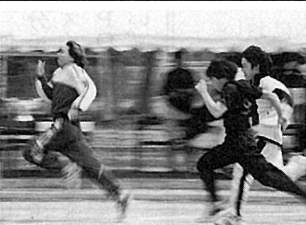
（この項次号へつづく）

体育祭盛大に開催される

情報工学科がV1達成!!

に雷鳴が轟き、大粒の雨がグラウンドを打ち、開催が一瞬危ぶまれたが、開催当日は梅雨入り前の強い日差しが戻り、陸上競技場にはまぶしい陽光が降り注ぎ、絶好のグラウンドコンディションとなった。

まず前年度総合優勝の建築学科より優勝杯が神馬学長に返還され、学長より「体育祭は、大学の歴史と共に歩み伝統に培われた行事であり、新入生諸君も日頃の運動不足を補うと共に新たな歴史を刻むように努力して頂きたい」との訓示があり、競技が開始された。



フォーム、きまつてるネ!!



負けるものか!!

注目の総合優勝の行方は、午前中の種目を終了した時点で、各科目ともほぼ横一線の様子を呈していた。が、後半のリレーで上位を独占し混戦を制した情報工学科がV1を達成、優勝杯を手の中にした。また各種の入賞者にメダルと賞状が小林学長より授与され、滞りなく体育祭は終了した。

本来ならばこれで解散になるところであるが、実行委員の努力はまだ終わらない。全員が固唾をのんで見守る抽選会が控えているからである。おかげで豪華な景品を手にして、思わず笑顔のもれた人も。晴天の下、素晴らしい体育祭を演出した実行委員の諸君に、大きな拍手を贈りたい。

建築学専攻の劉君の設計案

八十六大学の優秀作品集に!!



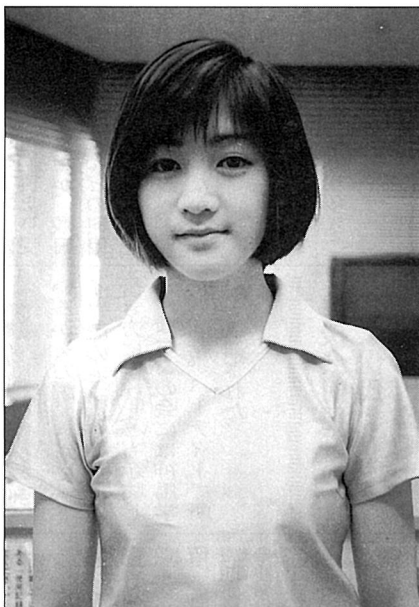
建築学科では、優秀な卒業設計を数点選抜し各種の団体が催す作品展に図面を出展している。今年は台湾からの留学生で現在博士前期課程一年生に在籍中の劉君の作品が全国八十六大学建築系卒業設計優秀作品百一点に本学の代表として、

建築以外の本をたくさん読み、多くの感動と出会い、いくらか辛くとも笑顔を忘れずに励めば必ず良い設計ができるでしょう、と言う貴重な体験談を頂いた。

みなで
キャンパス美化を
推進しよう!!

STUDENT face '96

佐藤良恵君は故郷の友人や母校を愛する心優しい人だ。その故郷は大曲市の東に隣接する仙北町、高校は県都秋田市の高校ラグビー界の名門秋田工業高校である。



情報工学科2年 佐藤 良恵 君
秋田工業高校出身

「文武両道」に翔ける日々

「一年生の時は、予想に反して苦戦しました。今は演習の課題で四苦八苦していますが、少し小聲で佐藤君に話しかけたら、情報工学科の時間割表には、三時間連続の試験や二時間連続の演習などが満遍なく配分されていると聞いて、毎日練習長したのである。毎日練習

講義が終わると佐藤君は空手道部の道場に駆け込み、部活動に熱中する。高校時代の華々しい実績をかわれ先輩達から大いに歓迎されて入部した空手道部であるが、彼女は今、過去の素晴らしい栄光などなかったかのようにマネージャー役を健気に務めている。練習中に負傷した部員の傷の手当、VTRでの試合の収録など、どれも、完璧に対応してくるばかりでなく、緊張が続き試合の間には佐藤君の何気ない心使いが選手の気持ちと和らげ、その場の雰囲気と和ませる。そんな佐藤君の存在を部員達は心強く感じているに違いない。（直村）

後援会定期総会開催!!

新会長に神山英一さんが就任



去る五月十九日(日)午後一時より、大学学生会館ホールにて平成八年度後援会定期総会が開催された。当日は、委任状出席を含め二四一七名の会員が出席。総会では、議長に北山良明氏(卒A・青森)を選出し、議事を進行。平成七年度事業報告を金城英三会長(4S・沖縄)より、同年度決算報告を赤田光平財務(4S・新潟)より、同監査報告を佐山攻監事(4M・栃木)より報告。並びに平成八年度事業計画案を神山英一副会長(4A・岩手)より、同年度予算案を長田之孝財務(4M・東京)より提案。慎重審議の結果、いずれも原案どおり満場拍手により可決した。

続いて、理事・監事の銓衡並びに役員選出の議案審議に移り、川島秀文監事委員代表(卒M・千葉)より銓衡委員が紹介され、銓衡結果を報告。理事候補者一〇名、監事候補者三名、留任七十四名・新任三十八名、全員が満場拍手により承認された。引き続き、役員選出が行われ、新会長には神山英一氏を選出し、以下八年度後援会の新体制が発足した。平成八年度後援会役員
会長 神山英一(4A・岩手)
副会長 佐山攻(4M・栃木)
赤田光平(4S・新潟)
曾木国智(3E・茨城)
田川鋭治(4A・静岡)
総務 矢島節子(3E・群馬)
財務 長田之孝(4C・東京)

●平成八年度「文部省認定免許法認定公開講座」 本年も夏期休暇中に開催

昨年度、本学で好評のうちに開設された、専修免許取得のための文部省認定による免許法認定公開講座は、今年度も引き続き夏季休暇中に開催される。

今年度は、昨年の受講者によるアンケート結果に基づき、その希望の多かった科目を主として検討、実施するもので、次の日程により、四科目、それぞれ四日間十五コマ、一科目定員二十五名で開催される。

この講座の受講資格は高校(工業)及び中学校(技術)

七月二十九日(月)
八月一日(木)
八月二日(金) 八月三日(土)
八月四日(日) 八月五日(月)
八月六日(火)
八月七日(水) 八月八日(木)
八月九日(金) 八月十日(土)
八月十一日(日) 八月十二日(月)
八月十三日(火) 八月十四日(水)
八月十五日(木) 八月十六日(金)
八月十七日(土) 八月十八日(日)
八月十九日(月) 八月二十日(火)
八月二十一日(水) 八月二十二日(木)
八月二十三日(金) 八月二十四日(土)
八月二十五日(日) 八月二十六日(月)
八月二十七日(火) 八月二十八日(水)
八月二十九日(木) 八月三十日(金)
八月三十一日(土)



列席者と歓談する大川理事長

大川理事長が全国工業高等学校長協会で講演

あるべき教育を示唆

今年度八月を目途に日本テレコム(株)、(株)アステル東京のPHS局を設置し、PHSが構内で使用できることとなります。PHS局は、アンテナ数4本局数八局。通信可能エリアは、屋上に設置するアンテナから半径一五〇mで、クラブ棟、学生食堂、学生食堂・中庭周辺、第二食堂(ピザ)など、日本の「理工科離れ」の基盤が揺らいでいるなか、本学の大川陽康理事長が、五月二十一日、東京九段のグランドパレスホテルで開催された第四回全国工業高等学校長協会の研究協議会で、約四百五十名の列席者を前に熱弁をふるわれた。

●学園創立90周年のシンボルマーク テーマは無限大の拡がり

本号より使用の学園創立90周年のシンボルマークは、機械工学科・野中宏親教授(工業デザイン)の手になるもの。コンセプトは創立90周年の「90」にちなんで、古来、中国や日本において縁起の良い数字である「9」を10倍にまで拡大。さらにその数字に無限大を表す∞の記号イメージをかき重ねてシンボライズされた。今後、さまざまな学内メディアに使用される。

叙位叙勲

◆故・長谷部 和男工業教育研究所教授 従五位勲四等瑞宝章(五月四日)
◆故・町山 忠弘機械工学科教授 従五位勲四等旭日小綬章(五月十日)

国外研修(5/6月)

◆渡辺 勝彦教授 建築工学科 出張先「カナダ」(4/23~5/1) 目的「カナダ・クローズド・パス旧裁判所再

TOWN & CAMPUS

ゴミ処理に協力を!

宮代町からのお願いの一つにゴミの問題があります。とくに、はじめて下宿・アパート等の一人住まいを始める新入生はゴミの始末を町のルールに則り処理してください。宮代町は全国でもゴミ分別・収集について先進的な取り組みを行っているところです。大学構内も同様ですが、是非協力をして下さい。

編集後記

いよいよ、来年に迎えます学園創立90周年(大学創立30周年)の具体的な記念事業についてお知らせできる段階となりました。大学は、本記事にあるように「仮称ステューデンセンター」建設を目指し、工友会、後援会、またその他の方々に格別な協力を願っています。21世紀の新しい時代を築いていくキャンパス整備の一層の充実にご協力下さい。記念の行事等種々の企画についても本紙面を通じ、順次お知らせして行きます。構内でPHSが8月頃から利用できる環境が整います。高度情報化時代に対応するキャンパスを作り、多目的なサービスが通信回線を介して利用できるようなしていきたいと、考えています。

◆町山忠弘機械工学科教授と長谷部和男工業教育研究所教授の二人が、5月に相次いでお亡くなりになりました。本学への功績に感謝し、心からの哀悼の意を表したいと思います。

◆もうじき長期の夏期休暇に入ります。暑さにめげず、心身ともに鍛えましょう。(F)